

佛陀の歴史性

渡 邊 棗 雄

一

この、佛陀の歴史性、即ち地上唯一の現身佛陀として傳へられる釋迦族出身の瞿曇尊が所謂二千五百年の昔、本當に印度に出世したか何うかの問題に關しては、その昔、蘭の Kern (Der Buddhismus, übersetzt von H. Jacobi, I.S. 297 ff) 佛の Senart (Essai sur la Légende du Buddha, Inde édition, 25 f) 氏の如きが全然これを否定して、その印度に於て歴史の開けて以來、最も勢を逞しうしてきた太陽神話の一具體化にも過ぎまいとしたことは東西かくれない事實である。但しその、Kern 氏の方は後に別本を公にするに至ては、必ずしもその前言に執着せざるかの態度を取るに至り (cf. A Manual of Buddhism — 立花教授譯「佛教大綱」——この指示は宇井教授の御懇志に負ふ)、次で Senart 氏の方に關しても、例せば彼の Windisch 氏の如きが、Senart 氏の眞意は必ずしも全くかやうな佛陀の否定に終始するものではなかつたなど辯解するもあつたけれども (vgl.: Mira und Buddha, 1895, S.180)、とにかく當年に於ては、學界に甚大なる波紋を書いたのが事實で、爲めに再び獨の H. Oldenberg 氏は謂ふ所の地上唯一の佛陀が一生八十年に亘ると細な行實を枚々描出して、あの名作「佛陀」(Buddha, sein Leben, seine Lehre, seine Gemeinde — 三並良氏譯「佛陀」、木村泰賢、景山哲雄二氏譯「佛陀」)をものするや

うになつたのも亦全じやうにかくれなき事實である。而して、爾來に於ては、さうした Oldenberg 氏の努力に負ふか否か、ともかくも全じ問題の關する限り、學界はまづ鳴りを靜めたかの様子で、遂に英の Elys Davids 夫人の如きは、これら諸の説明の企てられてからこの方、史的證據は考古學的にも、亦文書的にも堆積せられ、それは時と共に増し行いて、結局、今日となつては、我らは、釋迦種出の瞿曇悉達多の生涯を史的事實として少くとも、古代諸宗教の何れの教祖とも簡ぶなく、能く證明せられたりといふに足るであらう。(Buddhism-home library-p. 17)

などいふに至てゐるが、果して問題はかやうに決了的なのに似るであらうか。従て、この間に於ける我々は果して如何に少くとも一途の考を定めて然るべきものであらうか。

二

まづ、その探究を往年の Kern, Senart 二氏等の主張を反省することより始めるに、改めてのべるまでもない如く、同 Kern, Senart 兩氏は所謂大乘佛典を専ら中心資料とし、以て當年の結論を誘導した所であるけれども、今、同大乘諸典を今日の我らを以て評するならば、それは已に幾度か先匠らによつて卓抜な見解の發表せられたるやうに、我々としては明瞭^(一)し難き後代の諸の年記、人物、土地等を爆露してをるばかりでなく、思想は多岐に分れ、矛盾背馳は餘にも繁く、要するに、甚だ長い時間と過多なる人物とを包藏するものやうであつて、所謂佛陀なる史的人物を導き出し得る十分な理由ある所とは思はれない。のみならず、その中に現れたる所謂佛陀なるものに關しては、却て當年の兩氏が主張した通り、殆ど普遍的に太陽神かに少くとも解せられても仕方のない趣のみが多くて、所詮、兩氏當年の主張は丸で火の

ない所に煙の立つたものともし難い心地もあるに相應して、今日の我らとしても決してこの所謂大乘諸佛典を材料に史的佛陀を十分に想定し、導き出すことの出来る所ではない。

三

而して、右に次ぐ Oldenberg 氏の資料になつた殊に所謂小乘經律二藏の諸佛典は何うか。といふに、これらも亦一言もつてこれを評するとを許されるならば、再び今日に於ては、何と抗辯のしやうもない甚だ澤山の後代年記、人物等を含説し、思想の多端、矛盾の多様は前と寸毫撰ぶなく、更に或は文學的發展さへ中に認めらるゝ事實さへあつて、畢竟結論としては、かの所謂大乘佛典中心に Kern, Senart 二氏が曾てしたのと五十歩百歩なるの嫌も否み難いのである。

四

かくして、あの Oldenberg 氏の最も熱精なる努力と寄與とのあつたに拘らず、所謂大乘諸佛典を以ては無論のこと、Oldenberg 氏當年の資料だつた再び所謂の小乘經律二藏を以てしても、それらはその平面的解釋を以てする限りでは斷じて史上唯一の釋迦佛陀を證するに足るとは考へられないのであるが、察するに、同じ事實は同様にして傳はる今日の全佛敎文獻をあげて論ずる場合にも結局は免れ得べからざる運命たるの外もないであらう。故に、方面をかへて、次には上の Rhys Davids 夫人の言の中の今一としての考古學的諸論據で、中にも最古のものの中にして、差當り、最も關係深きあの阿育王の諸遺品であるが、いふ要もなく、同諸遺品中には所謂地上出生の現身佛に盛に關言してゐるから、その範圍では、かゝる現身佛陀の傳説は明白に同阿育王の時代までは遡ることの出来るに十分だらうけれども、それ以上に遡

つてはまた何らの權證なきを何としよう。就中間題の阿育王諸遺品には、これまた今日にあつては最早何と争た所で遂に一の理想佛たるの餘もない拘那含牟尼 Kanakamuni を同列に取扱ふものもあつて (cf. V. Smith: Asoka, p. 39, 54, 73, 224; Bhandarkar: Asoka, p. 170; etc.) 自然、こゝからいへば、諸他の釋迦瞿曇佛に關する關言を、同じて受取らるゝ少からる可能性とへあるべしとせられねばならぬだらうに於てをや。

五

て、上の Rhys Davids 夫人の甚だ含蓄的斷定にも拘らず、のみならず、恐らくは普通一般の諸君子の要望と思惑とも亦拘らず、繰返す要もなく、史的佛陀の證明は未だ尙、斷じて決定的とは信じ難い。それは現在までの如何なる材料によつてするも、かの阿育王以上には決して遡るべきものではないのであつて、上の Rhys Davids 夫人の斷定の如きも、或は幸福なる無豫想の譏さへ免れない思を否み難い所以がある。が、果して然らば、我々が修道の權證は極めて濛朧化せられ、心のシンバリ棒は恰も奪去られて終うかにも衝動を感じしめられずにはおかぬ事實であるが、我々は蓋しそれに甘ずる外もないであらうか。何とか打開の方法はなきものであらうか。

六

といふに、我々はこゝにまづ回想せねばならぬが、以上、現在までのすべての材料をたゞ平面的に解剖的に取扱ふ限り、史的佛陀の證明をする所は何一なく、我々はたゞその傳説が阿育王の時代まで遡るに足るといふ程度に満足の意を表する他もない如くだけれども、併せて、それらのどれ一として、あの Kern, Senart 兩氏の或はしたやうに、積極的に

史的佛陀を全く否定し去るよりない證據を提示せるものはなかつたのである。かくして、史的佛陀は積極的にこそ、これを證據立てられないながら、何も全くなかつたと斷念せねばならぬ所以は存しないのであるから、我々はまづこゝに漸く褪滅し去らむとせるかの勇氣を回復してかゝる必要あるものであらうが、さてかくして次に反省せば、繰返し概言することを許されるならば、已に先覺の種々勝れたる見解を公にせられてゐる如く、如上全佛教の心棒を價すといふべき大小乗諸の佛典の中、所謂小乘經藏、即ち具體的にいつて五部 (Pañca Nikāya) 四阿含等の阿含部は諸他聖典に對する根本原型的文獻であつて、それらは内容の上よりするも、形の上からいふも、すべて他の諸の佛典に對する發展史的根幹を意味する。然るに、さうした所謂阿含部に關し更に改めて攻究せむか、それは如上阿育王の時には已にともかくも認められてゐた聖典であつて、從てそれは同阿育王よりは更に遡ることの出来る文獻たらねばなるまいが、こゝにさうした阿含部に約し、極めて當面の關係に於て著目すべき事實である。何となれば、已にいへるやうに、如何にも與へられたものとして平く觀察してこそ、同阿含諸經は後代の明な年記あり、人物を記し、思想は多端、矛盾は多岐で、可成り長い時間と甚だ多數なる人格とを包藏して、それらの全集積として成ることを見窮められるけれども、それらの平面的觀察の内奥に突進し、これを史的に攻究する所あらむか、それはかゝる合糝雜博的外面に隠れて、殆んど金玉の絢爛たる一大思想體系を潜め、そしてその論理性の優拔、順じて全局に溢るゝ眞理性は眞に眼もあでなるの評を檀にするに價する。而も、もつと注意させられることには、さうした金玉の一大思想體系は現阿含諸經の根本出發點のそれなることを豫想せしめておつて、如上表面的合糝雜博性はさうした根本の金玉的思想組織から次第に大小厚薄色取りくゝの論理

的楔機を求めながら、加上添附されて行たものであることを跡づけることが出来る。然ればかうした金玉の一大思想組織こそ、上述のやうな佛教文學史的見地に反省して、全佛教に亘る根本發祥的一組織であつて、就中、上の約束の命ずる所、それはあの阿育王以前に大要存在したものであらねばならなかつた。——と、こゝまで論じて來れば、この上のかくの詳論は改めて必要とするまでもなく、かやうな根本金玉の一大思想體系の説者としての當然の一人格、就中全じ根本金玉の一大思想組織の靈妙、卓越さより考へれば、明に唯一絶妙の人格の豫想せられねばならないことは寧ろ餘にも當然なるべきの結論といふべきであつて、從て、こゝにまづ我々は我々一般の喜と安堵とにまでも、ともかくもある一定現身佛陀——ある靈妙殊勝なる人格の史的存在を揣摩し得るのに庶幾いものがあるのである。所が進んで尙考ふるならば、元來の所謂史的瞿曇佛陀に關しては、何もそれを絶對的に拒否せねばならぬ理由は少しもあつた譯ではなく、單なる積極的に何らその實跡を示し得なかつたといふだけのことなのだから、今さうしたまだ完くは破せられ切らぬ歴史の殘渣を如上新なる史的確證をあげられむとするある靈妙の人格に被らせ、之を釋迦族の出、瞿曇悉達多などと作つて、謂ふ所の八相成道悉くは到底歸すべくもないにしても、尙、出胎、安坐、成道、說法、乃至、涅槃等の行實は親しく踏むだ所として、所詮、個人的色彩とそれによる史上具體的の輪廓とを賦するとしても、それは果してさう甚だしくも多大なる傳説との妥協とする外もないであらうか。いな、こゝに至れば、我々は上に次ぐ一層具體化した喜と安堵とにまでも、上來幾度か言傲して來た地上唯一のそれとしての個人的瞿曇釋迦佛の史的想像までも逞うし得るに庶幾いかと覺へられる所以も存するのである。

七

て、以上要結すれば、従前諸の學匠らの取來つた如く、單なる諸の文献や考古學品などをたゞ平面的に取捌くといつた態度だけでは何うしても史的佛陀の抽象はこれをよくし得べき期待もかけられないのである。而してそれに對して、全じ材料を暫く史的立場より眺め、それらの根本發祥の就中一大金玉的思想體系に約し、その説者としての史的佛陀を案ずるときには、そこに自らの所以があつて、所謂史的佛陀の存在もやゝこれを想定し得るに足るものがあるではなからうかとは則ち如上全論をあげての要領なのであるが、思ふに論の中心的頼り所としての所謂金玉の一大思想體系、並にその如上甚しく混沌たる現阿含部よりしての精撰に關しては、今全く豫想的なりし所である。けれどもそれは聊か慮る所のあつたのによるものであつて、幸にこれを諒恕せられたいものと思ふ。

(九・十一・一〇)

註 (一) cf. Winternitz: Geschichte d. Ind. Literatur Bd. 2, S. 230 ff.; 望月信享教授「淨土教の起源及び發達」、椎尾辨匡教授「佛敎經典概説」其他。

(二) 一、大般涅槃經には、佛涅槃後七百歳云云といふ(曇無讖等譯卷七—大正12, p. 403 c; 慧嚴等譯七—大正12, p. 843 b; 法顯

譯四—大正12, p. 830 a)

二、文殊師利般涅槃經には佛涅槃後四百五十歳云云と記す(大正14, p. 480 c)

三、大方等無想經には我滅後百二十年……我涅槃後千二百年……全涅槃已七百年後……等と見ゆる(大正12, p. 1097 c; p.

1099 c; p. 110 c)

- 四、首楞嚴三昧經(大正15, p. 688 b)その外甚だ多数の大乗經中には滅後五百年云々の文あることは周く人の知る通りである。
- 五、摩訶摩耶經(大正12, p. 1013 bc)には、……二百年已、尸羅比丘……三百歲已、青蓮華眼比丘……四百歲已、牛口比丘……五百歲已、寶天比丘……六百年間、馬鳴比丘……七百年間、有二比丘、名曰龍樹……等との文がある。
- 六、楞伽經(魏譯)には「於我滅度後、南天大國中、有大德比丘龍樹菩薩……」などいひ、その楞伽「Linga」の名そのものも、今日では明に現錫蘭のこゝであつて、論じるまでもなく、佛陀は曾て關知しなかつた所である。
- 七、大悲經二には「我滅度後一百年中」として阿育王のことを記す(大正12, p. 961 a)
- 八、蓮華面經上(大正12, p. 1071 b)にも、全じく阿育王のことを記し、その阿育の或は師だつたとも傳説せられる優波鞠多のこゝをも敘する(大正12, p. 954 a) 等々。
- (三) 一、巴利律の小品5, 12 (2, p. 294); 五分律三〇(大正23, p. 192 a); 四分律五四(大正全上, p. 968 c)等には佛滅一百年とし、また、十誦律六〇(大正23, p. 450 ab)には全二百年として所謂第二結集のこゝをのへ、二、白法祖譯佛般泥洹經下(大正3, p. 175 ab); 失譯般泥洹經下(大正全上, p. 190 c); 法顯譯大般涅槃經下(大正全上, p. 207 c)等及び諸律典には佛滅九十日等にして行はしといふ全上第一結集のことを記し、三、中阿含一五一、阿曇愁經=M. 93 AssalaYana-s (2, p. 149); etc.には或は佛滅百六十年頃、かの歷山大王が印度に浸入し來つたことを豫想すと概して説かるゝ餘尼(Yona)即ち希臘人のこゝを記し、同經異傳の竺曇無蘭譯梵志額波延問程尊經(大正1, p. 877 a)には餘尼の代に一層後なる月氏の名をおく。四、雜二三、及び二五(大正2, p. 162 a, p. 165 b, p. 170 b, p. 177 b; p. 180 a)には全上の阿育王及び優波鞠多の史傳及び本生を認められる。その他。

- (四) 現律藏は(一)所謂二百五十戒等の戒目、(二)その一、一の説明(三)諸の儀式規の三部門より成り、就中、大師に於ては、丁度今記する順を追うて文學史的に追加、制定せられた所であらうとは諸家の數々全稱する意見である—— cf. Oldenberg : Introduction to the Vinaya text, p. xvff; Rhys Davids: Buddhism, London p. 163; Buddhist India, p. 188; Buddhism, its history and literature, (new edition), p. 53 ff; 宇井教授「印度哲學研究」2, p. 126; etc.
- (五) cf. Hultzsch; ZDMG 40, 1886, S. 58 ff; Ibid: jud. sut. 21, 1892, p. 225 ff; V. Smith: Asoka, p. 221 ff; 宇井教授「印度哲學研究」(四)「阿育王刻文の研究」; Bhandarkar: Asoka, p. 305 tc.
- (六) 姉崎正治教授「現身佛と法身佛」序 p. 8—9; 松本文三郎教授「宗教研究」二の六、七兩號所載、涅槃經に關する研究參照。全上央崛摩經研究參照。宇井教授「印度哲學研究」二、(p. 267)舍黎婆擔摩經等に關する研究參照。椎尾教授「佛教經典概説」中の諸論全上。Burnouff: Introduction à l'histoire de Buddhisme indien pp. 103—128 (cf. Kern: Introduction to his translation of Saddharmapundarika—S. B. E. XXI, p. X.); etc.
- (七) Sāñchi; Bharāhat 諸地の發掘品中には陰顯の二つたらの消息を示すものが甚だ多い。拙著「佛陀教説の外延」二版、p. 118; etc. 參照。